【表紙・裏表紙解説】あいち国文第17号

表紙・裏表紙写真ともに『続福寿　下』（愛知県立大学長久手キャンパス図書館蔵）。

全二巻（本学が所蔵するのは下巻のみ）。半紙本。二十九丁。刊本。四つ目綴。二三．二×一六．一センチメートル。「木者庵湖十」の後序および享保五（一七二〇）年の沾涼による自跋あり。万屋清兵衛刊、吉田宇白彫之。本学所蔵本は何ヶ所か、墨で塗られた箇所がある。

『続福寿』は絵俳書で、享保二（一七一七）年に刊行されて絵俳書流行の先駆けとなった同作者の『百福寿』の成功を受けた続編として編まれた。下巻巻末に沾涼の師であった露沾による立句の詞懼がある。

編者の菊岡沾涼は一六八〇―一七四七年、江戸中期の俳人。伊賀上野の人。『江戸砂子』『諸国里人談』などの地誌や随筆などの編著が数多くある。また、後序を書いた湖十は江戸時代前期―中期の俳人である初代深川湖十のこと。

掲載箇所は稲荷神社の鳥居の上で笛を吹く人物の絵と「たか打と／知らず／初午／朝太鼓」（買方堂何虹）の句と、傘をさす高下駄を履いた鍾馗のような人物とその傘の上に積もった雪が傘の下をのぞき込む鬼のように見える絵と「三更の空手も／あやし傘の雪」（露玉）の句がそれぞれ収められている。何虹は江戸中期―後期の歌舞伎役者、二代目音羽次郎三郎の俳名か。

参考文献：『愛知女子短期大学古俳書目録』（市橋鐸）、『俳文学大辞典』（角川書店）、『日本人名大辞典』（講談社）、愛知県立大学図書館貴重書コレクション（http://opac.aichi-pu.ac.jp/kicho/kohaisyo/index.html）。

（文責：熊澤美弓）